



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第7主日 C年 (2022年2月20日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：サムエル記上 26章2、12—13、22—23節

第二朗読：コリントの信徒への手紙一 15章45—49節

福音朗読：ルカによる福音書 6章27—38節

父なる神のように

三つの朗読から

第一朗読で、ダビデはサウルのいのちにとどめを刺す好機を得ました。サウルはダビデのいのちを狙っていたのです。すでに『サムエル記上』24章では、ダビデはサウルを殺害することができました。しかし、「この方は主の油注がれた方なのだ」（サム上24章7節 フランシスコ会訳）と手を止めます。今日の朗読箇所でも「殺してはならない。主が油注がれた方に手をかければ、罰を受けずには済まない」（26章11節）と、とどめを刺しませんでした。ダビデは自分が神さまから油注がれた、つまり、祝別された存在であることをよく知っていたのでしょう。同じように油注がれた者であるサムエルに手を下せなかったのです。

第二朗読は、最後の節にあることば「似姿」を心に留めてください。似せて造られた像のことを似姿といいます。肖像と書いて「にすがた」と読ませるときもあるようです。人間は神の似姿です。わたしたちは今は「最初の人アダム」のもとにあって「土からできたその人の似姿」になっていますが、復活の時、「天に属するその人の似姿」となるのです。

福音朗読では、「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」（ルカ6章36節）を味わいましょう。

隣人を愛して生きていきたいと誰もが願っています。しかし、自分と気の合う人とは仲よくできますが、何となく気の合わない人とはうまくやっていく自信がありません。しかし、その人も神さまの子どもで、神さまからおめぐみをたくさんいただいているのだと思えば、そう簡単には相手を手を無下にはできないでしょう。今日の第一朗読のダビデはそんな気持ちだったのだと思います。

「主が油注がれた方に手をかければ……」はダビデの思いを表しています(サム上 26 章 9 節)。

うまくいかない相手とどのように付きあえばよいのでしょうか。イエスさまのことばにヒントがありました。「あなたがたの父が憐れみ深いように」。父なる神さまのあわれみ深さに気がつくこと、感じる、知ることがなによりも必要なのです。

説教

十字架を見つめる信仰の態度を身につけたいものです。聖フランシスコも崩れ落ちたサン・ダミアノ教会で、そこに掲げられた十字架を見つめ続けました。それが彼の召命のきっかけとなりました。そして、十字架の主イエス・キリストにあこがれ生まれました。十字架への愛が、聖痕という恵みとして実を結びました。

フランシスコ会は、十字架を見つめ、十字架からの語りかけに耳を傾け、十字架にかけられた主イエス・キリストのように生きることを望む人々の集まりなのです。

十字架の理解はその人の人生の歩みの中で深まっていきます。ちょうど、ご聖体に対する理解がその人の人生の一幕一幕と関連づけられて深まっていくのと同じです。人生のいろいろな場面で十字架と出会うことでしょう。時には十字架から目を背けたくなることもあるでしょう。時には十字架から慰めをいただくこともあるでしょう。十字架は、わたしたち一人ひとりの心に語りかけてきます。その語りかけを受けて、人は生き始めるのです。

「あなたがたの父が憐れみ深いように」とイエスさまはおっしゃいます。父なる神さまの憐れみ深さは、十字架に現れます。あの無惨で、力ない十字架のイエスの姿が父なる神さまの憐れみを表しているのです。

十字架から憐れみを見いだせますように。

